

帰国生受け入れとグローバル人材育成の実際

— 多様性がつくる学校生活



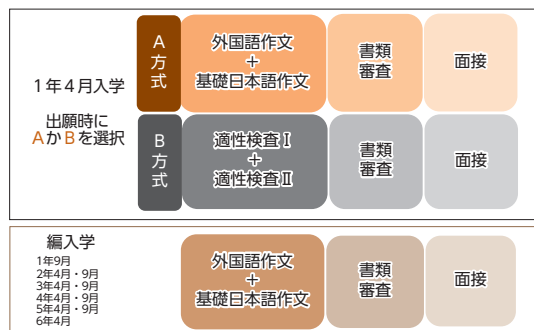
授業風景
グループワーク

東京学芸大学附属国際中等教育学校(以下、本校)は2007年4月に国際社会で将来活躍する人材を育てることを目指して開校した新しい学校である。前身校の附属大泉中学校と附属高等学校大泉校舎で長く受け入れてきた帰国生のみならず、外国籍の生徒などの多様な教育歴を持った生徒をも受け入れて開校から10年が経過した。その間、2010年に国際バカロレア機構(IBO)の中等教育プログラム(MYP)、15年にディプロマプログラム(DP)の認定校、14年からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)および15年からスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定校となり、多様な生徒と多岐にわたる学習と活動に取り組んできた。ここでは本校の特色を紹介したい。

帰国枠のない受け入れ校

本校で帰国生は受け入れているが、「帰国枠」入試はない。帰国生審査ももちろんない。

現在の社会では、海外に行ったことがなくても帰国生と同じような特性を持っている生徒がい



本校の入試・編入試

東京学芸大学附属国際中等教育学校

副校長 星野あゆみ

る。両親がどちらも日本人でも、外国人生徒のような特性を持っている生徒もいる。また、帰国生でも一般生のような特性を持っている生徒もいる。その逆もある。つまり、「帰国生」とか「一般生」の定義や境界線が曖昧あいまいになっているのである。

そこで本校では、附属大泉小学校からの連絡進学で入学する生徒(約45人)以外には、A方式(募集30人)とB方式(募集30人)の2つの入学選抜の方式を用意し、志願者に好きな方式を選んでもらう。どちらの方式にも共通なのは書類審査と面接で、異なる点は入学選抜の当日の検査である。A方式は外国語作文(英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国・朝鮮語から選択)と基礎日本語作文。B方式は適性検査Ⅰと適性検査Ⅱとなる。結果的には帰国生の多くはA方式で入学するが、B方式で入学する帰国生もいて、A方式で入学する非帰国生もいる。帰国生というカテゴリーを設けずに、帰国生の特性は様々な個性の1つとして捉えている。

知識の量を測らない入学選抜

本校の入学選抜における検査は知識の量を問うものではない。本校の教育の特色は「探究学習」や「協働学習」である。そのような学習スタイルに適した生徒の入学を希望しているため、検査においても、課題を解決するためにすでに持っている基本的な知識や資料を組み合わせる解釈をする力や、解釈や考えを表現する力を問う内容となっている。小学校で習う知識はもちろん身につけておく必要はあるが、学習指導要領の内容を逸脱したり、難問奇問と呼ばれるような問題はない。